

デ・レーケ と富山

常願寺川を見て、「これは川ではない、滝だ」と言った人として知られているデ・レーケだが、どのような人物だったのだろうか？

デ・レーケは、1842年12月5日、オランダ南西部のコリンスプラートという街で生まれた。父ピエテルは、村落を北海の荒波による水害から守る輪中堤をつくる築堤職人。少年の頃、家業を手伝う中、建設現場でJ・レブレットと出会う。彼は、当時オランダ内務省土木局の技官を務めていた。子どもにいないレブレットは聡明で向学心に富むデ・レーケをかわいがり、基礎から、次第に自身が

もつとも得意とする難解な水理学まで教えるようになった。

レブレットは、その後、王立アカデミー教授となり、のちにデ・レーケの親方となるファン・ドールン、親友となるエッシャー、日本でもともに働くことになるムルデルにも水理学を教えている。

デ・レーケは、23歳の時、アムステルダム郊外から少し東にある小さな街・ドルヘルダムで輪中堤の仕事をした後、1867年、アムステルダムと北海を結ぶ北海運河の主要な構造物の一つ、オランダ工閘門の現場で主任監督として工事を成功させ、土木局の技官達から高く評価された。この工事では堤防だけでなく、大規模な構造物の施工についても経験を積むことができた。同じ年の7月2日、25歳で結婚している。

翌年、日本は明治時代幕開けの年。明治政府が早急に解決しなければならぬ課題の一つに、大阪湾の問題があった。大阪湾は、淀川の末流がいく筋かにわかれ注いでいた。その中心の安治川あじがわの河口から約700〜800m上流の河岸に波止場が作られ、それが当時の大阪港になっていた。しかし、波止場自体も狭く、洪水のたびに上流から土砂が流れて来るため、河床が上昇し、安治川も大阪湾も水深がどんどん浅くなっていた。そのため、入港する外国船も急減していた。

当時、明治政府は、多くの公共施設的设计をイギリス人に頼んでいたが、イギリス人は水にかかわることは不得手で、水の分野はどうやらオランダ人が優れているらしいということを知る。⑥